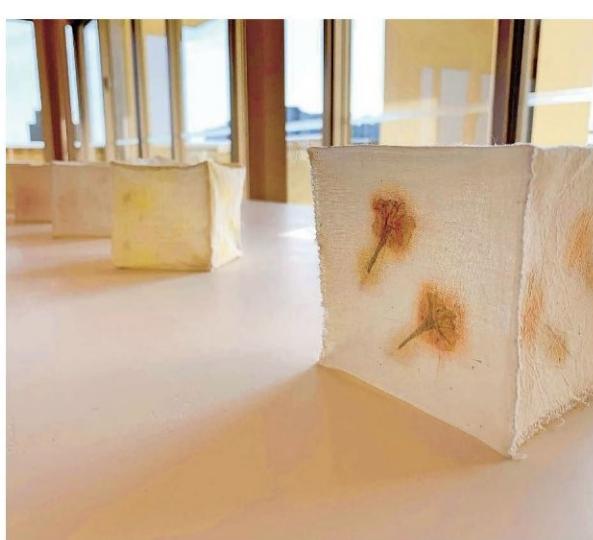




2月

上村  
豊

今月は二つの「卒展」に  
絞って紹介したい。  
沖縄県立芸術大学第30回  
卒業・修了展 (2月13~17  
日、県立博物館・美術館)  
絵画専攻では、個々の表



内間汐梨〈そこはかとなく〉(写真提供・琉球大学)



山下奏子〈消えゆくまなざし〉(部分)

琉球大学卒業・修了展 研究者交流施設・50周年記念

(2月13~17日、琉球大学 念館)  
琉球大学の卒業・修了展では、会場設営作業も学生が自ら行なう。表現を他者と双方向的に共有するための「場づくり」としての展覧企画の重要な課程に位置づけられている。

例年どおり個性的な表現が出そろつたが特に工芸分野での研究の充実が、この数年の同大の傾向としてあげられるのではないか。今年の出品作の中には、内間汐梨による「染」という行為と現象そのものにフォーカスした研究が際立つた集中度を示している。

## 染に集中した作品 内間汐梨

程の中に小さな発見を積み重ね、それが表現としての構造の核となるよう繰り返し地道な試行錯誤を加えてきた結果、繊細で柔らか



内間汐梨 展示風景 (PIN-UP)

琉大卒業・修了展

呉屋聰美らの表現、あるいはイメージとそれを規定する支持体やフレームの間にある不安定な隙間に上に、危ういバランスで足場を掛けいくような湯浅要の表現などである。

## 自己治癒行為示す 山下奏子 街中に展示場開拓 翁長瞳

伊藤誠也

「故郷熊本の被災後平らで、整えられた四角のキャンバスに絵を描くこと」の翁長瞳の一連の作品が、その完成度と自律性、そして無駄なくスマートな、それでいて充実した意欲を感じさせてくれる秀作である。

「デザイン専攻や工芸専攻において充実した意欲を感じさせる提示方法によって、そのクリエイカルな表現の体質を感じる。観者である私たちが視点を移動させ、作品との距離や視角を変化させることにより、彫刻を構成する外観、表面、材質、形態、構造、量塊、空間と



翁長瞳 展示風景



伊藤誠也 展示風景 (旧・若松薬品)

開拓し「CRAY WORKS」伊藤誠也修了制作展(2月13~24日、旧・若松薬品)

現内容(イメージよりも、一方で、これらある種知りたじゅといった様相を帶び、そこに意図せず出現した、「少女」の存在とその意味は、作者にどつても、そして絵を見る私たちにどつても、未知なるもので、そのことによって逆に、揺るぎないアリティーを獲得しているように感じられた。「少女」の存在とその意味は、作者にどつても、そして絵を見る私たちにどつても、未知なるもので、そのことによって逆に、揺るぎないアリティーを獲得しているように感じられた。「少女」の存在とその意味は、作者にどつても、そして絵を見る私たちにどつても、未知なるもので、そのことによって逆に、揺るぎないアリティーを獲得しているように感じられた。「少女」の存在とその意味は、作者にどつても、そして絵を見る私たちにどつても、未知なるもので、そのことによって逆に、揺るぎないアリティーを獲得しているように感じられた。

一方で、これらある種知りたじゅといった様相を帶び、そこに意図せず出現した、「少女」の存在とその意味は、作者にどつても、そして絵を見る私たちにどつても、未知なるもので、そのことによって逆に、揺るぎないアリティーを獲得しているように感じられた。